

市内のボランティアグループで活動する 皆さんの「声」の一部をご紹介します！

令和3年7月に、市内で医療・福祉等の支援に携わるボランティアグループを対象に活動実態調査を行った結果、活動者の皆さんから様々な「声」をいただきました。

地域に根差して、自主的・自発的にボランティア活動を行う方々が、コロナ禍でどのような思いで活動しているのか、日頃どのような課題を抱えながら活動しているのか等をご紹介しますので、ぜひご一読ください！



☆今回、調査した内容

1.活動のエピソード・・・P2～9

支援が必要な方との心温まるやりとり、活動を続けていて良かったと思うこと 等

2.コロナ禍をきっかけに始めた活動の工夫について・・・P9～15

こんな工夫をして活動している、こうした方法で活動を再開し始めた 等

3.グループの課題・関心事など・・・P15～20

取り組んでいる活動に対する課題、グループの運営上の課題 等

↓ 次ページから掲載しています！

1. 活動のエピソード

〇人とのつながりや仲間の素晴らしさについて

- 日本留学を支援したカンボジア人の学生が、今や日本政府高官の通訳までするようになった。昨年度、外務大臣表彰を受けた。
- 活動を続けていてよかったと思うことは、ボランティアグループを続けてきたことで、皆で定期的に話し合える場が作られていることです。会員もそれを望んでいて、一人ひとりにとって大きな力になっています。公民館が開館されていれば、月1回は集まり、お互いの生活や様々な情報交換をしています。
- 皆さん、料理活動が好きな方ばかりでとても良い雰囲気です。
- 活動を続けて来て良かったことは、地元で仲の良い友達が沢山できたこと。皆さんの色々なアイデア等、教えていただくことが沢山あります。コロナ禍で活動を休止していると、そのありがたみをひしひしと感じます。ボランティア活動を続けることで、参加者の方からも様々なアイデア、エネルギーをいただき、自身が若返ってきていると実感しています。
- 2002年10月にボランティアグループを立ち上げました。立ち上げ当初は、高齢者宅への訪問活動や子ども施設への訪問活動を中心に進めて来ましたが、2012年9月から高齢者の立寄り処事業、2018年5月から「子ども立寄り学び処」を立ち上げました。訪問活動と立寄り活動を取り組んでいます。活動を進めている中から、横山地域を中心に、利用者さんの見守り合いネットワークが出来ています。また、地域で子どもたちとのふれあいの雰囲気が感じられるようになってきました。グループ賛同人が設立当初15名でしたが、20年を経過しようとしている現在、出入りがありながらも19名と協力員5名を有し、毎月活動の反省と取組み協議をつみ重ね、そのことが、活動の継続につながっていると思う。まさに継続は力なりです。
- 地域のふれあいフェスティバル（福祉まつり）のスタッフにグループとして参加をしていますが、顔見知りの方が来られた時は、ハッスルします。いろいろな人とふれあう楽しさがあります。

- 自立支援の対象者の中で、3～5年と長く継続して活動してくれる人が4人います。
「活動が必要なときは言ってください!」と自ら言ってきて、緊急に作業を要するとき、積極的に関わってくれます。活動の主力の担い手になっています。

○私たちの活動の魅力や喜び

- 保育園や幼稚園で人形劇をしています。子どもたちが真剣な表情で見えてくれたり、笑ってくれるとき、とても嬉しいです。活動を続けて良かったと思います。
- パタカラ体操に参加した人の表情が豊かになったり、言葉の発音がはっきりしていく。誤嚥性肺炎の予防や唾液分泌の促進にもつながった。
- 毎月1回「なかよし会」と称して、地域住民の方対象に手芸の日を設けています。次は何をやるか常に悩まされますが、楽しみにして毎回参加して下さる方が大勢います。メンバー全員、元気をもらっています。
- 長年訪問している「なごみの里」では、「沢山の人々が待っているよ」と施設長さんから聞いております。おばあちゃんに泣かれたり、手を合わせて拝まれたり喜んで頂けるのが、私たちのパワーのもとになります。お化粧してあげて喜ぶお顔が忘れられません。また、ボランティア仲間のやさしい心に感謝しております。
- ボランティア活動に行くと、とにかく参加者の笑顔が多いことがうれしいです。
- 毎年実施していたバスツアーで、ほとんど感情を表さない障がい者の女性が、出かけた先の猿とふれあい、とても良い表情を見せてくれて、スタッフの心も和みました。昭和60年からのスタッフとの交流が続けられていることが、お互いの健康にも繋がっています。
- 一人暮らしの方が食べに来て、息子さんに話したら「安心したよと言ってくれた」と話されていました。「チョットチョット“お姉さん”」と呼ばれて、喜んで良かったですら・・・。
- 令和2年1月の施設慰問(40施設、回数1,389回)を最後に活動が停止しております。活動を続けて一番良かったことは、最後に皆様がかけてくれた「是非また

来てください。」のお言葉。胸が痛いです。

- コロナが流行する前の活動では、JAXA のはやぶさ 2 が回収物を地球に投下した際の情報保障や結婚式での情報保障が印象に残っている。小学校や中学校で要約筆記を体験してもらう活動など、話すと興味を持ってくれる方がたくさんいて、活動にもやりがいがあります。
- 国籍如何にかかわらず、相模原市民として仲良く暮らしたいというコンセプトのもと、始まった日本語ボランティアです。男性・女性・早口な人・声が高い人・低い人など、色々な日本人の日本語が聞ける様になることがまずは第一歩というのが、勉強の基本スタイルです。でも、ネイティブであるはずのボランティアも、学習者さんの鋭い質問にはあたふたし、「次回までに調べておきます」とボランティアの宿題になることも多々あります。色々な国の情報や、日本との習慣の違い、また、外国の方からみておかしい日本の習慣などが聞く事ができるのもボランティアとしての宝です。例えば、「日本ってコンビニの入り口に子どもには見せたくない本が置いてあるのってどうして？」の質問には、疑問に感じないでそんなものだと思っていた日々の生活を反省したりもしています。夏・冬にはお楽しみ会を開催し、折り紙や日本の歌、また日本の伝統文化であるお茶会などを通して、みんなで一緒に楽しんでいます。このときは、ボランティアも学習者さんも普段見せない大きな笑い声で、室内が一杯になっています。
- 地域の年配の方々の支援を頂き、地元の竹を使って「流しそうめん」をやると（ほぼ毎年）子どもたちが集まってきて、楽しく交流が持てました。夏休みに参加を募集して実施した「お泊り会」キャンプファイヤーやピザ作り、登山や川遊びなど、忘れられない思い出になりました。毎年の地域の文化祭への参加で、活動の情報や報告。キレイに飾り、見てもらっています。
- 毎年、豚汁作りをしました。相模湖駅伝競走大会、かながわ駅伝大会で前日から食材切りに会員が午後から 7 時までガンバリました。当日は 8:30 分集合で、大鍋で 800 食作りました。選手・監督に振る舞いました。寒い中大変でしたが、おいしそうに食べる姿が印象深く良い思い出です。

- 子どもを主体とした活動なので、季節の行事を大切にしています。クリスマスには地域の方に、サンタクロースとして参加してもらいました。初めて見る実物のサンタに驚いてしまう子もいましたが、プレゼントをもらって少し距離が縮まった様子も見られました。その他豆まきやハロウィンなどを通して、行事にふれるだけでなく、家族以外の人とのつながりを深められたと思います。
- 未就園児対象なので、初めての社会の場でもあります。それと同時に母親にとっても初めてのママ友作りの場だと思っています。私自身全くママ友がいない状況で遊びに行き、この場がきっかけとなって、とても仲良しのママ友を作ることができました。日頃の育児の悩みを打ち明け、人と話をするだけで気持ちが晴れます。そんな憩いの場となっています。
- 情報社会が進むにつれて、機器操作が苦手な方が取り残されてしまいますが、テープからCDに移行する時は、CDを聴くための勉強会を開きました。1人でも取り残さないために、会員が相談にのり、CDに使用するプレクストーク(※)の入手方法の手続きなどもお知らせして、現在皆様CDで聞いて頂くことが出来ています。今は聞けませんが、読者(利用者)との茶話会をして作っているCDへのご意見を伺う事がとても楽しみです。

(※) プレクストーク (PLEXTALK) とは、「視覚障害者用デジタル録音図書読書関連機器及びソフトウェアに用いられるブランド」のことです。

- 障がい者スポーツの練習のお手伝いで、連絡事項などを聾(ろう)の方に手話で伝えたりしていますが、私の語彙が少ないので、苦労しています。でも勤のいい方たちなので、汲み取ってもらえるのでありがたいです。
- 職場に聾の方が来られた時、つたない手話でも使って話したら、とても喜ばれて嬉しかった。
- 職場の近くの聾の夫婦と手話を通じて、交流が持てた。そのご縁で現在私たちのサークルに来て下さっています。
- 手話を学び始めて間もない頃、職場に聾の方が一人で来られた。間違いだらけの手話で必死に対応。その3ヶ月後に通訳者を伴い、お礼を言いに来て下さった。以降

定期的に来られ、手話による会話を楽しませて頂いた。

- 多忙な日々から少し離れて、調理をしている子どもの姿に、ヒヤヒヤしながらも、ニコニコと嬉しそうに見ている親御さんの姿が大変印象に残っています。
- 数年前サロンに参加された精神障がいのある方が、「毎日ブラブラしている」ということで、本人と相談し、城山地区にある障がい者施設につなぐことが出来ました。現在も元気に通所しております。
- コロナ禍で活動が全く出来なくなっていますが、例年は「お話し会」、「中国出身の方を講師に本場の家庭料理教室」「マリーゴールド等の染め物教室」「工作教室」等のワークショップ、「地元で活動する音楽家のコンサート」等を開き、大人も子どもも共に和気あいあいと楽しんでもらっていました。「染め物教室」で、プロの方を講師に「葛の葉染め」を体験しました折り、1,2番煎じ汁の時は黄色に、3,4番目の煎じ汁では濃い緑から若草色へと変化する過程を目の前にしました。いつもは土手筋に生い茂り、迷惑がられている葛の葉の予想外の変化・有益性に驚嘆し大いに楽しめました。「料理教室」では粉だらけになりながら、出来上がりを美味しく頂き、「凧づくり教室」では、作った凧を揚げるという設定も加えた楽しみもあり、「コンサート」では、一緒になって歌い踊り、笑顔があふれていました。どんぐり文庫では、本の貸し出し活動だけではなく、地域とのつながり・サロンの要素にも力を入れてきているので、これらの活動を通して意外な出会いがあり、いろいろな方々との繋がりが持て、どのイベントも印象深いものです。各活動の設営については、少人数のスタッフで取り組んでいくことは、大変なことです。皆さんの笑顔に励まされ、一つのイベントが終わるとすぐ「次は何を！」という気持ちになるから不思議です。
- おしゃべりサロンのゲームなどは手作りしているのですが、毎回楽しみと言ってくれます。カラオケサロンの参加者で、認知症が進んでも歌詞を忘れず楽しめることが素晴らしい。
- 余った時間を上手に使い、本を点訳することによって、喜んで下さる方がいらっしゃると言うことは、幸せなことです。「読みました」と礼状が届いた時には、続けていてよかったと思います。

- 車イスの外出介助の手伝いをした時に、施設入所者の方々が手足が不自由で、言葉もうまく話せないのに、身体いっぱい喜びを表現して下さいました。車イスの掃除と整備が終了して、それを見た職員の方や入所者の方が、とても喜んで感謝された時などやり甲斐を感じ、この活動をしていて良かったと思います。
- 外出介助のお手伝いに参加し、車椅子と一緒に散策した時、最後に“ありがとう”と言われとても嬉しく思いました。色々な施設での協力・ふれあいを通して、新しい世界を知り知識が広がりました。ボランティア活動で“おはようございます。お手伝いしましょうか”と声かけが自然に出来るようになりました。カラオケ入力のお手伝いは、受け持つ利用者さんが毎回変わりますが、担当してほしいと指名されたり、お手紙を戴く事もあり、限られた時間内で楽しんで歌って頂く事をこころがけていました。
- 相模原市内のデイサービスへ伺い、体操やレクリエーションに参加させて頂いたり、利用者の方とお話をさせてもらいに行った時の話です。（コロナ禍以前）私自身ボランティア活動の経験は浅く、「何かお手伝いがしたい！」と「何かの力になりたい！」と思い、ボランティア活動に関心を持って時折参加していたのですが、デイサービスでは利用者の方にたくさんのお話を教えて頂いたり、色々な方とお話できるよう気遣って頂いたり、助けて頂くことばかりでした。ボランティア（自然と助けられ、支えられるものでもあるんだと気づいたきっかけです。ありがたい経験として心に残っています。
- ①毎年秋に開催されている「相模原市視覚障害者協会の福祉大会」にボランティアとして参加しています。福祉大会は、準備から当日の運営まで基本的には相視協の人達が実施しています。私は、会場設営や当事者の誘導等を担当しました。市への要望事項等をまとめた大会決議、教養講座（百人一首解説）、そして昼食をはさみ午後のアトラクション（マンドリン演奏）まで盛りだくさんのプログラムを仕切っている相視協の皆さんと一緒にいると気が引き締まります。
- ②相模原市社会福祉協議会主催の「みんないいひと体験講座」で、視覚障がい者の誘導體験講座を実施しています。子ども達（小中学生）は、視覚障がい者に接し話を聞き、誘導體験を行います。最初は好奇心だったのが優しい心になっていくので、とても嬉しい時間です。

③活動を始めてから街で視覚障がい者を見かけたら、見守るようになりました。また、実際に声をかけて誘導のお手伝いをする事が出来ました。困っている人を見かけたら、お手伝いをするのは当たり前ですが、活動により一歩前に踏み出せるようになりました。

- 活動の中で「ウィッシュカード」の取り組みがあります。認知症の症状がある方ない方も、それぞれが感じている「困りごと」や思いを「ウィッシュ」と呼び、助けてもらいたいことをウィッシュカードに記載し、それをパートナーが共有し、助けてほしい人とのマッチングを行っています。最近では“お仕事ウィッシュ”の活動もスタートし、当事者の方が働く場、人の役に立つ実感を得られる場が増えてきました。

○コロナ禍における活動の工夫について

- 現在、福祉施設への訪問が休止の為、活動ができていない状況です。
令和3年4月に「会員同士のつながりづくり」のため、活動に対する思いや意見を共有しました。寄せられた言葉を一部記載します。
 - 傾聴活動をお休みしてみて、ボランティアは他人のためではなく、自分のためだったのだと感じました。
 - グループの一員であることが、心の支えとなっています。
 - 一日も早く安心して活動出来る日を心待ちにして、感染予防を心掛けている。
会員同志がつながることで、活動はできませんが、支え合いながらボランティアへの意義を保てる様にしたいと思っています。
- コロナ禍で本来業務である「案内業務」ができず、他にどんな活動ができるかを模索した。そんな中、グループ会員から、病院に置いてあるピアノにカバーを作りたいと提案があり、活動日に作成してもらうことにした。
- この1年はコロナ禍の中で活動は停滞していますが、3密にならない活動や、どうしても必要な活動だけは行っています。中でも、目の不自由な透析患者さんの自宅から病院までの送迎は欠かさず行ってきました。歩いて10分程度ですが、往復の道すがらおしゃべりを楽しんでいます。こちらは複数人が交代で担当しているので、色々の話題で喜んでおられます。

○コロナ禍での活動の困難さについて

- 地域の小学校の学童保育所で年3回手話に触れてもらう活動をしているが、子どもたちがとても興味を持って参加してくれる。しかし、コロナ禍のため、約2年間活動出来ていない。
- 個人宅での傾聴や、高齢者施設での個人傾聴、歌の会、ゲーム、折り紙等を中心に活動を続けております。
コロナ禍で活動を中止せざるをえない中、個人宅での傾聴活動の対象者から「早く来てお話をしたい！」という強い要望が寄せられていますが、対象者の皆さんとグループ会員がともにワクチン接種を完了してからの訪問ということで、お話しをさせて頂いています。
- 現在のところ、活動中でのコロナ感染はありませんが、運転ボランティアの急な発熱で、感染の疑いが生じたことがあり、利用者・家族・利用者の関係者などの対応の難しさを感じたことがありました。“ふれあい”を大切にしながら、“会話を控えて”としなければならず、活動者と利用者お互いにストレスになっていると思います。
- 聾(ろう)の方々と楽しくお話ができるよう、手話の勉強をしております。聾の方々をお招きしてお食事会等をしておりましたが、現在はコロナ禍のため、活動休止となっております。

2. コロナ禍をきっかけに始めた活動の工夫について

○マスクの作成等、新しく始めたこと

- 横山地区自治会連合会よりお祭り用のお手拭きを頂いたので、マスクを作っておしゃべり会に参加しました。高齢者の方々に差し上げ、大変喜んで頂きました。
- マスクや雑巾の寄付を行っている。新たな人の輪を広げることができた。
- 今年度は「マスク作り」を実施して大変喜ばれました。

- ・マスクを作って販売。フリーマーケットが開催できないため、集まった古着をエコバッグや雑巾にリメイク。雑巾は施設に寄付。
- ・会の活動内容にベルマーク収集があり、会員各々がベルマーク収集に努めた。
- ・医療衛生材料作りについては、以前から行って居たが、コロナ禍で新たに外来部門のテープ切りや処置シート折り等を行い始めました。病棟への配本サービスは、病院への訪問ができないため、各部署のスタッフステーションに置いてある置き本の交換・回収のみを実施している。

〇メンバーや仲間同士のつながりの大切さを再認識

- ・毎月、顔を会わしていた事業がお休みになり、寂しいという声も聞こえてきました。公民館の利用が少し可能になった時点で、定例会を1時間の目途に開いて会員の親睦を図りました。ほぼ全員の参加があり、楽しい時間となり、事業再開に向けて安心しました。
- ・時々、会報「水しぶき」を発行して、会員間の疎通を図っています。

〇Zoom等オンラインを活用

- ・グループの月例会・研修等は集合とZoomを併用して開催しています。
- ・コロナ禍のため、私達の主な活動の高齢者・障がい者への援助は制限を受けることが多くなりました。ボランティア活動への参加も見合わせるという現実もありました。オンラインによる交流・会議開催への取組みは、本来の事業計画と合わせ、新しい活動への工夫となりました。活動紹介のDVDを制作中です。中央ボランティアセンターのご指導・ご援助に感謝しています。
- ・コロナが広まって、参集型の定例会が難しくなり、Zoom定例会を開催しました。全員が自宅からのアクセスでは割と簡単にできますが、会場と自宅両方では、なかなか難しいものがあります。しかし、遠方の方や外に出られない方と、Zoomを通して久しぶりに会えるというのは、メリットでありとても楽しく過ごせます。Zoomを通じての近況報告などは、とても盛り上がります。それを題材にして、要約筆記の学習をしています。

- ・コロナ禍になり、対面での活動はストップせざるを得ませんでした。しかし、今後のことについての話し合いの場を持つことや、授業もオンラインを取り入れて少しでも前に進もうということになり、Zoom の使い方の勉強会を何度か開催しました。ボランティアのほとんどは、ネット環境にあまり詳しくない為、まずは Zoom をインストールするところから始めましたが、今ではオンライン授業を行っている会員が少しずつ増えてきています。
- ・Zoom での学習会。制限時間内で有効に学習するため、各自予習しての参加で進めております。一つのテーマで 3 週シリーズで学習しています。同じ曜日・時間に集まる事を目的として、短い時間ですが、メンバー皆で手を動かすよう努めています。
- ・オンラインでも活動を行っています。オンラインだからこそ参加できる方もいて、地域を超えて多くの方に参加してもらう事ができました。

○「活動してほしい」との声に、工夫して対応

- ・令和 2 年度に続き、今年も活動しない予定でしたが、タンポポ（藤野）さんよりオフアがあり、7 月より月一度活動する予定です。（障がい者の施設）皆さんにおしゃれを楽しんで頂ける活動にしました。お化粧・マニキュア・髪の毛のアレンジ、男性にも髪のアレンジとネクタイとサングラス等で写真をとってあげてプレゼントしたいと思います。
- ・おもちゃを修理する病院を定期的実施。コロナ禍では休院しているが、こどもセンターへ持ち込まれたおもちゃは休院中でも引き取って、修理して返却した。

○コロナ禍でも諦めずに出来ることを実施

- ・昨年から梅雨明け後の夕方の水やりを多い年は 30 回していましたが、コロナ禍の外出自粛を受け、夏向けの花植えを中止し、千日紅の種を 6 月に蒔きました。8 月に小さな花が咲き始め、10 月に見事に成長。中央小学校 1 年生の生活科の教材や放課後子ども教室のクリスマスイベントに利用してもらいます。相模原市長をはじめ、水を戴く警察署・銀行、お世話になっている方々に花束プレゼント。ドライフラワーになる品種で喜ばれています。

- サロンに来られる方の様子を見守っています。(それとなくですが。) 一度皆様に近況をお尋ねする手紙を出しハガキに返事を頂きました。(保護シール同封)
- 月に一度、公民館で、検温・消毒・ソーシャルディスタンスを考慮した上で、ネット上の傾聴講座をプロジェクターで流して、傾聴活動に関する勉強会を実施。再開時に“より良い傾聴の提供“が出来る様努力しています。
コロナ禍になって傾聴活動に伺えていない個人宅の方たちには、訪問している会員の寄せ書きをお渡しさせて頂き、大変喜んで頂きました。
- 人形劇の開催について
 - 上演する時⇒マスクをしたまま上演する。
 - 客席（子供達）と舞台との間を前よりあける。
 - 子供たちとのふれあい（人形とタッチする等）はコロナ禍の間はしない。
- ソーシャルディスタンス（確保）と三密の防止に注意を最大限に払いながら、毎月の事業を行っています。
- コロナ禍を意識し、2020年3月頃から、グループの賛同人会は必ず開催しながら、情報交換を実施しています。その中から、各活動の利用者さんとの「つながり」を持つことが必要と考え、賛同人会開催ごとに「つながり通信」資料を作成、利用者さんにお届けしています。その中から利用者さんが地域で見守り合いネットワークを作られていることが分かりました。現在「つながり通信」が発展し、利用者さんが投稿する「つながり箱」の発行を隔月で発行お届けをしています。
また、長期的な立寄り事業の中止の中、屋外で楽しめるフィンランド発祥の「モルック」ゲームにも取組み始めました。
- 食事の提供についてはその場で振舞わず、お弁当箱に詰めて、お持ち帰りにしていただくようにしています。
- 去年全ての訪問活動、展示会等が中止となりました。今年6/12、13で久しぶりに相模大野図書館で「布えほん展」を開催させて頂きました。コロナ前は会場いっぱい作品を飾り、ジュータンの上では子ども達が布おもちゃで楽しむ姿が多かったのですが、今年は展示方法を変え、布おもちゃは置かず、壁面の展示品にも飾ら

れず、唯一テーブルの上の布えほんだけ手に取って見ていただく様に変更しました。静かな雰囲気の中落ち着いて親子で布えほんを見て、楽しむ姿が多く見られました。何度も気に入った布えほんの読み聞かせをしてもらったり、連日来て頂いたり親子でのほほえましいふれあいの姿を見させて頂き、こちらまで嬉しくなりました。お父さんの姿が多かったのも嬉しかったです。

- 三密を避けるために、会場を広い部屋に変更し、座席の配置を教室式（前向き）に変更して、定例会を開催している。全会員にフェイスシールドを配布。手話は表情や口形も大切な会話のツールとなり、マスク着用では隠れてしまうため、フェイスシールドを活用している。会場が使用できない場合、オンラインで学習ができないか検討中。有志で Zoom での学習を体験した。
- 電話相談が増えた。時間制限のない自宅、深刻な内容で深夜に及ぶこともある。入管に行くときは、1回で済むように、ラウンジでまとめ、翌日持参する場合もある。相談者にすぐ対応できるように、資料を多めにラウンジに置いておいた。
- コロナ禍なので皆で集まるのは危険と判断し、グループの総会を紙面で行うことにした。
- 視覚障がい者の情報保障のための録音活動を行うにあたり、録音室での録音を中止し、すべて自宅録音にした。自宅録音ができない人には、勉強会をして指導。録音用の貸し出しパソコンを充実させた。（整理して回した）編集・発送作業のみ少人数で行う。昼食をとる時は、間隔をとり、黙食でおしゃべりはマスクをつけてから。
- 皆で集まることが、又いろいろなイベントが出来なくなってしまい、どの様に活動を続けていったら良いのかと会員一同悩み話し合いました。自宅から出られない、又迎え入れる事も出来ない、人の顔を見て話をする事も出来ないでも毎日三度の食事の支度をしなければいけない。ストレスはどんどん溜まる。そんな地域の方々に、私たちが主食・主菜がフライパン一つで簡単に作れるレシピを持って、こちらから出向いてインターホン越しにちょっとお話しして、レシピをポストに入れさせてもらい、又その後要望があれば、別のメニューをお渡しする。そして、元気確認をする。こんなことを今考え、進行中です。

- 従来は、どんぐり文庫を会場にしたインドア的活動でしたが、今回初めて外に飛び出し、佐藤文夫氏を講師に「探鳥会」を計画しました。緑区奥牧野まで足を伸ばして、探鳥会の方々と共に、早朝の緑の木々の中を歩き、鳥たちの囀りを聴きながら過ごしました。探鳥会のメンバーの方々の中に数名、どんぐり文庫に関心を示され、文庫を尋ねて下さるようになりました。

イベント開催の折に「どんぐり文庫のお知らせ」を、地域回覧（地区外のリピート参加者へは通信）していましたが、今回は人を集める形のイベント開催が出来ないので、「どんぐり文庫ニュース」として、いろいろな人に文庫にある本の中から紹介してもらい、「この本いいな」のコーナーを主軸にしたお便りを発行しました。例年頂いている助成金は、イベント開催費に充てていましたが、今回はどんぐり文庫の蔵書を増やす費用に充てさせて頂きました。購入した36冊については、随時「どんぐり文庫ニュース」で紹介していきたいと思っております。

- サロンはまだ開催できないのですが、季節のお手紙に脳トレ、お口の体操・あやとりなどのプリントを添えてお届けして様子を伺っている。老人福祉施設の花壇の手入れは、密を避け、当番制にして活動を続けている。
- LINE・メールでの連絡を始めました。会員間の勉強会も出来ていませんでしたが、黙読による勉強会を始めてみました。
- ワクチン予約がとれない方たちのお手伝い、メンバー一人ひとりが身近な方たちの日常生活のお手伝い、シルバーサポート、思い愛ネットの窓口紹介、百歳体操への参加案内など、出来ることを行った。
- コロナ禍をきっかけに始めた活動ではありませんが、定例会後のワーキングで以前から続けている刺し子作り、使用済み切手の整理、雑巾縫い、手作り品作成等、会員揃って親睦を深めております。コロナ収束後の活動が出来ます様、月1回定例会を開催します。「できることをできるときに」は会のモットーです。
- まず団体内で深められるつながりを考えています。コロナ禍により、学外での活動にあたるこれまでの活動も難しくなり、なかなかボランティア活動も難しい中で、大学の学生同士でのつながりの希薄化、新入生などそもそも大学の人とつながれないという学内の状況を鑑みて、まずは今できるつながりを考えることから始めよう

と当団体で交流を図っています。このつながりを基盤にこの状況でも行えるボランティア活動を考え、感染症拡大のリスクが低い、郵送という手段を使ったボランティア活動、オンラインでのボランティア活動や学習支援の見学会などを検討・企画し、実践したいと考えています。

- ・視覚障がい者の外出時等の誘導支援の活動をしています。

私たちの会では「視覚障がい者の理解（誘導入門講座）」を主催していますが、コロナ禍で実施方法が大きく変化しました。

① 会場の人数制限と誘導ペアの変更

市民ギャラリー会議室利用人数が30人のところ、15人に変わりました。また以前は受講者同士のペアで誘導體験を実施しましたが、現在は受講者1人にスタッフ1人で実施するようにしました。その結果、受講者数が24人（最大）から7人に絞り開催回数を増やす方向です。

② 除菌対策

検温や参加者名簿の作成以外に、受講者の誘導體験時には①フェイスシールド②ビニール手袋を配布し、除菌対策を実施しました。また、除菌シート（10枚入り）を配布しています。

3. グループの課題、関心事など

○グループの課題(メンバーの高齢化、モチベーションの低下など)

- ・また皆で昼食をはさんで活動できる日が早く来てほしい。
- ・コロナ禍の為、全ての活動が停止して一年以上がたち、人数も減った事もあり、会員の意欲が無くならない様に、月1回の定例会を4月より再開、近況報告や勉強会を行い、いつ再開しても大丈夫な様に前向きに会を行っている。
- ・オンライン授業になると、個人情報などが拡散するかもしれないと危惧しているボランティアもいます。特に日本語教室では、数カ月でやめてしまう学習者さんも多く、個人情報をいかに保護するかが課題となっています。
- ・Zoomでの対応、再開までの支援員(メンバー)のモチベーション維持、活動が再開できた後、学習者(参加者)の人数が減らないか等が課題。

- 日頃、活動者の人数の減少や、サロン活動のための会場が取りにくい等の課題を抱える中、色々試しながら活動の見直しを図っていたときに、コロナ禍で活動がなくなってしまった。
- 会員が年々高齢化し、音声訳の基本である「滑舌のよい聞きやすい読み方をする」ことが、段々難しくなってきた。若い年齢層のボランティアを募集したいが、養成講座の参加者は70代で、録音技術を習得して頂くのがなかなか大変である。
- 一昨年度に2名の入会があったが、コロナ等の関係で学習に参加出来ず結局そのまま退会。本年度は更に2名が退会（高齢のため通うのが困難との理由）。
今まではメンバーが交代で学習係を担当してきたが、月に1度の聾(ろう)者との交流・学習に変えた。このままでは存続も危ぶまれる状況。今年度は続ける予定ではあるが、来年度はどうなるか？
- グループメンバーの年齢層が平均70歳代となり、団体運営の課題となっています。新しいメンバーを募集するためのチャンスとしていた養成講座が開催できなかったことが影響しています。
- 担い手が高齢化し、自動車の運転がこわくなり、遠出ができなくなった。
- メンバーも高齢になってきていますので、若い方の入会を希望します。
- 仲間たちもそれなりに年を取り、この先続けられるのだろうか？気力も抜けている様子。
- 会員に高齢者が年々増加してきており、若い会員を募集したい。（会員の70才以上65%である。）
- 活動者の高齢化が進んでいる。お献立料理の材料費が高いので、現状の料理づくりが難しくなっている。
- 50代、60代の方がなかなか加入して頂けない。

- 会員の高齢化が進み、さくらまつりなどのイベントの出店が難しくなっている。
休眠会員が多く、どうしたら活動してくれるか悩んでいる。
- 会のメンバーの平均年齢が高齢化しており、活動継続の為に、積極的に新規会員（若い方）の加入促進を図る等、若返り対策が急務となっています。
- 老人ホーム等へボランティアとして行く交通手段は、ボランティアさんの自家用車で通っていたのですが、高齢化と共に段々と難しくなってきました。安全面を考えて交通手段等の課題が残るところです。
- サークル活動も 30 年近くになり、会員の年齢もそれなりに上がって食材の買い出し等いろいろ問題点が出てきました。コロナ禍では、施設との交流・サークル本来の活動（料理・菓子等つくって食べて情報交換）が出来ていない状況で今後の活動を模索中です。
- 録音室を使える日が来るのか、対面音訳の再開は可能か、懇親会はいつになったら出来るのか、等全てが新型コロナ禍の終息待ちである。昨年度から今年度の会員数は半数になってしまった。ご高齢の方や病気を持っている人は、家族からの反対もかなりあったようです。今一番の課題は新入会員の募集をいかに成功させるかです。
- 運営上の最大の課題は、会員の高齢化と減少、会員になる方（若い方）が、いない事です。役員になる事をためらう又は役員をやりたくない。
- 会員が高齢（主に 70 歳代）のため、コロナ禍の中コロナ感染の不安から、水泳指導の活動を中止しています。
- 活動者が高齢になり、活動場所に行くまで、交通機関もなく徒歩にての往復なので、いつまで出来るのか心配です。活動内容には心配ないのですが、皆よく頑張っています。
- 皆さん全員で年齢的に無理が出てきたため、活動が出来なくなりました。

- ・主に、高齢者の方を対象に事業を行っています。このところ、グループのメンバーの年齢が、この事業に参加される高齢者より、上になってしまいそうです。そこで、会員は参加者の一員としても楽しんで、事業を行うようにしています。

※「グループメンバーの高齢化による活動継続の危機」は、他にも多くのグループから課題として寄せられています。

○グループの課題(上記以外)

- ・カンボジアと日本の友好をいかに促進するか。
- ・多くの聾の方達と交流する機会を持ちたい／コロナ禍で難しいけど、皆で食事に行きたい／聾の方が、言葉の意味・ニュアンスが分からない事があり、「これはどういう意味？」と聞かれた事があります。普段何気なく使う言葉でも、改めて意味など気付かされた面がありました。普段生活していて困った事、意味が分からない事等、聾の方とお話出来るのが、興味深いです。／手話を通じて日本語の奥深さを改めて感じました。話し言葉に訳せない手話にも興味が尽きません。／もう少しメンバーの人数が増えて欲しいです。是非、見学に来て下さいね。
- ・コロナ禍で密にならない様に、大きな部屋を借りなければならないので大変です。
- ・会員数が増えているのに、コロナ禍で共有する時間が減っています。そのため、資料や情報の共有が難しくなっているのが現状です。コロナ禍で Zoom の利用などもありますが、やはりスマホや PC の利用が苦手な会員には不便に感じることもあると思います。
- ・録音テープ利用者の高齢化並びに入所・死去による減少が課題。市内在住の視覚障がい者に対して、各サービスの有無の提供を親切に行っていきたい。
- ・活動するためには堆肥・種代・燃料・除草剤・殺虫剤などが必要な為に今後資金が不足するのでは、ボランティアのメンバーによる燃料・殺虫剤さらに飲み物、食物の提供があり、楽しい田名畑の会が成り立っています。現在、参加費 1000 円ですが、増やす必要が発生すると思います。収穫量が多い場合での処分の対策、子供食堂、福祉施設への提供・販売・その他考える必要があります。

- 17年目の活動に入り、代表の後継者をどうしたらよいか問題です。
- 会員の人数に対して、依頼が少ない。

○グループの関心事(トピック)

- 外国の方を支援するボランティアグループです。今年10月で結成30周年になります。外国人メンバーは、「パーティーしたい」とはしゃいだ笑顔を見せます。最年長の方は50歳を超えています。
- 皆が楽しく食事の支度が出来、お客様に喜んで食べていただければ良いと思って、作っていきたいです。
- 大人も楽しめる講習会には、皆関心があります。
- 大変に良い内容の活動と自負していますが、利用者さんもお高齢になり、あるいはお亡くなりになる方も多く、また近年はコロナ禍で活動自体を休止しているところ。メンバーも大変に忙しくなっており、再始動のめどはまだ立っていませんが、「やりたい人が、やりたい時に、やりたいことを、やりただけやる」というのがモットーでもありますので、ゆっくりやっています。
- コロナ禍が収束されれば、施設見学会、親睦会として会食会映画鑑賞会などを実施していきたいと考えています。
- オンラインでは各々のWifi環境が整っていないと困難なため、活動を休止しておりますが、コロナ禍が収束し、暮らしが落ち着いたらどういう活動をしようかということをお話し合っております。
- なんととっても団体で参加させてもらっていたボランティア活動への参加がコロナ禍により、できていないということです。オンラインや郵送を手段として、感染症拡大防止に配慮した活動を検討している中ではありますが、まだまだ模索中で足踏みしている状況です。活動先で知り合った方と顔も合わせられていません。この状況の中で、地域の方々と接する機会はどう持てるのかということは関心事の一つです。

- 車イス講習の講師の資格取得や防災についての知識取得をメンバー全員で目指している。地区社会福祉協議会の事業には、さらに積極的に参画し、お手伝いをさせていただく。
- 私たちがサロン活動を始めたときは、市内にサロンが少なく、集まれる場所を提供する意味があったが、今は100歳体操の場やデイサービスも増えており、サロンへの参加者が減少傾向にある。認知症など高齢者の事をもっと知り、望まれるボランティアを考える活動を始めている。
- 私達のグループは見せるボランティアでなく一緒に踊って楽しむのを目的にしていますので、施設には令和2年3月より(デイサービスには)参加出来ないでいます。落ち着いて入れる様になったらと、工夫をしながら準備をしています。ほかほかフェスタ等参加出来るものには、出来るだけ参加したいと思っています。